

※※ 蛙声(あせい)を一言 ※※

まだ小説というものを書き出して間もないころの作品だった。或る婦人は「ポルノだ」と非難の口調で言った。一方で或る同人誌の編集者は「純文よ、これ」と評してくれた。また、データ入力をしてくれた人は、ヒロインはもつと奔放で良いと助言をくれた。体の部位の名がストレートなだけでポルノ小説を創った覚えはない。最も記憶に残ったのは、二十代の恋人同士と思しき読み手が「とても良かった、これぼくら二人とも好き」と笑顔で礼をつくしてくれたことだった。もう二十数年前のことだが、読む人によつて印象や評価が区々であることや小説が独り歩きをすることを学んだ。藤村の詩に『君こそは遠音に響く入相の鐘にありけれ』(落梅集)という一行がある。入相には黄昏たそがれという意味があり、この作品では恋愛の黄昏どきを迎えた男女の心に響いた鐘の音という意味を強く意識してタイトルにしている。硬直した人間関係の中に飛び込み一見攪乱をさせて周囲を正す役割、心理学にいわゆる「トリックスタ―」は誰なのか。短編というには少し長いが、あえて台詞を多くしてあるので速く読み進めると思う。

## 入相の鐘 いりあい

馬場駿

永島知子は二年前まで夫だった男の背を、腕組みをしながら見ていた。少し撫で肩きみで、筋肉とはつきり分るもりあがりが一ヶ所もない。その肩が動いては止まり動いては止まりしている。止まる度に首が心持ち傾く。

「いいからだね、今度の子」

カンバスの中の女が瞳を得たときに知子が言った。

「胸は変えたよ」

振り返つて山本治はニヤリとした。左臉の上に小指の長さほどの傷跡がある。

「いくつ？」

「さあ」

「何て子？」

「それも……」

「あきれた」

「ジイアとか言ってたな、自分のこと」

「若い女の子が爺や？」

「ア。ジイア。ヤじゃない。意味不明だけどな」

知子は煙草を銜（くわ）えると山本の隣に立った。

「珍しいな、茜」

山本は知子を茜と呼んでいる。山本の雅号は蘇芳（すおうち）、一人がまだ一緒に暮らしていた頃、お互いが好きな色を選んで呼び合った。知子の筆名水島茜はその当時に生まれ、いまも変わらないでいる。

「いいけど……」

と知子は煙草を山本に向けて吐き出した。

「妬くなんてな」

「誰が」

「今まで一度もなかった」

「今も、これからもよ」

「……だからか？」

山本は目の前の裸婦に昨夜の知子の裸をだぶらせてみた。今まで見せたことのない知子の奔放な姿態に応じながら喉の渇きに襲われたものだ。

知子はもともとセックスには淡泊だった。しかも山本

と結ばれているその部分を冷徹に見据えているようなところがあって、山本は、何度か急速に冷えた覚えがある。

その知子が我を忘れて果てた。

山本は、知子の新しい男のテクニクを感じて内心ザラザラしたものを感じていたが、知子の反応が自分に對する未練、新しいモデルに對するジェラシーとなれば話が違ふ。まんざら悪い気はしない。

山本が二三度顎を撫でて知子を見たのと「茜！」と絶叫するのが同時になった。

カンバスの裸婦の右胸に知子がナイフを突き刺すのが、スローモーションのように目に映ったのだ。その映像は山本の脳裏で幾度となくリプレイされた。

「乳房だけ私よね、これ」

低い声のすぐあとで、知子が山本の頬を平手打ちする乾いた音がアトリエの隅々まで響いた。

「出てっくれる」

知子はナイフを床に投げ出して言った。

ナイフには血ならぬ油絵具がベツトリと付いている。「落ち着けよ」

「安心して、正気だから」

「僕からアトリエを奪うってことは、絵を捨てろってことだぞ。それが出来るくらいなら」

「別れなかった？」

「あ、ああ」

「売れない画家のイライラと、もの書きが締切に追われるイライラと、二つがぶつかって両方が生きるための離婚だったわよね」

「分ってるじゃないか」

「なぜ怒ってるか分らないの？ こゝは私の別荘よ。若いモデルをつれこんで裸にして、見詰めて、心のペニス立てて、カンバスに絵の具で射精してるのはいいわよ、許してあげる。けど、これはなあに？ 私の乳房だけをもぎ取って若い女の体にくつつける。これが侮辱でなくでなんなの」

「そういう意味じゃない」

「じゃあ何」

「絵としてのバランスがもう一つだった」

「そんなだから売れないのよ」

山本は眇(すがめ)をして侮辱に耐えた。

「あなたの美意識を疑うわ、この子！ あなたの言うアンバランスのまま描いてごらんさい、未熟さを内に秘めた、それでいて男を知り尽くしたような、えもいわれぬ妖しい女が息づくでしょうが、ここに、このカンバスに！ 違う？」

『そうに違いない』

山本は知子の荒い息の中に自分への想いを見た。正論だとも思った。それなのに産まれたのは激しい怒りだった。

「うるさい」

山本の唾が知子の顔を襲った。

「純文学を捨てて三文文士になったおまえが何を偉そうに。絵は僕の世界だ、入って来るな。第一……」  
急に下がった声のトーンが知子の反撃を止めた。

「誰を描いてもお前が絵に入ってしまう苦しみが分らないのか、このヒステリー」

山本は知っていた、こういう言い方しか知子を冷静にする手立てがないことを。

「じゃあ、描いてよ、私を描いてよ」

知子はそう言うと、薄手のネグリジェを一気に脱いで

裸になった。たわわな乳房を持ち上げ、何かを訴えるように山本見ている。四十にしては締っているが、愛すべき肉体ではあっても山本のキャンバスにそのまま入れる力はない。

「もういいよ」

山本は知子を抱き寄せて言った。

「もういいって？」

知子の激しい鼓動が伝わってきた。

「僕が悪かった」

「ほんとに？」

「ああ」

山本は知子の唇を吸った。

アトリエの窓から見える海が、山本の目にしみた。

二人は一番（ひとつがい）の小鳥のように唇を啄（ついば）んだあと、床に倒れこんだ。

「ほしい」

知子は山本の男をまさぐって言った。

「あやまるか」

「私、悪くない」

「痛かった」

平手打ちをされて熱をもった山本の頬が疼（うず）いている。

「ごめん」

山本は頷くと、知子の胸に唇を移した。

「きょうは何？」

知子がトーストをつまみながらきいた。

「バターピーはあきたな」

「ママレードはどう？」

「その分コーヒーの砂糖控えてくれたら」

「決まり」

山本は不思議に思った。『何々殺人事件』、永島茜とあるだけで本は飛ぶように売れているらしい。二三冊手にしてみたが、どれも似たりよったりで文学の香りなど皆無なのである。読者はスポーツ新聞を買うように気軽に茜の本を買い、読み終えるためめらいもなくクズ籠に捨てる。そういう数十万人に支えられていまの茜がいる。さらに自分のいまの生活がある。言い換えれば知子の排泄物を日々の糧にしているのである。山本は知子を批判する愚を知った。

「第一それは茜の世界」

事実、知子は山本につねづね言っている。「作品の価値を当の作家以外の人間が決めるのは大きな誤り」だと。

「自作の欠点を誰よりも知っているのは自分」だと。

「また呼ぶしかないわね」

知子がコーヒーカップを差し出しながら言った。

「連絡つくの？」

山本はコーヒーを啜ったあと、イーゼルに挟み込んだメモを知子に渡した。

「〇四五か、横浜ね。自宅？」

「気になるのか、そんなに」

「ばかね、しょっててる」

「呼び出した。男だろ、たぶん」

「ふーん、ちかごろの子よね」

「何が」

「だからさ、自分の女を一人住居の狼の許に送って、ヌードモデルやらせて平気。私ならそんな男、一時間も一緒にいないわね。要するに愛情がないのよ、お互い」

「狼はないな」

「老いたって付けてもいいわよ」

知子は肩をすくめると、パンを手にしてママレードを舌で舐め取った。

「よせよ、百年の恋も興醒めだな」

「二年で離婚したくせに」

「いまの見たらそれでも長すぎる」

「こんなのどう？」

知子はパンを二つに折って真ん中を齧(かじ)り、広げたかと思つと眼鏡にしてみせた。

「ばか、二二三ならともかく」

思わず山本は嘖き出した。

知子の顔から笑が消えた。

「そのくらいなのジイアって子」

長い十数秒という時間に二人は耐えた。

「知らない」

「うそ」

知子の眼許がピクツと動いた。

山本は、コーヒーカップに隠れるようにして眼を閉じた。実際には隠れるわけがない。

「抱けば、その子」

「茜……」

「お金で脱ぐならお金で買えるでしょ」

「いいかげんにしろ」

「いくら」

知子はハンドバッグを取りに立った。

「プライドがないのか、やめろ」

「いくらなの！」

振り向いた知子の眼が潤んでいた。

前回は画材店の主人の紹介でジイアが来た。

今度も同じでよかつたが、山本は直接電話をかけてみることにした。知子が横浜のマンションに帰ってから三日経っている。

山本は躊躇いながらも電話のある一階の居間におりた。

『抱けば、その子』

プッシュホンの数字を押す度に知子の台詞が山本の心の中で大きくなった。

何回かコールがあつた後、若い男の案内が入つた。

「長田亮(おさだ・りょう)です。留守にしています。僕に御用の方、名前と電話番号だけをお願いします。ジイアに御用の方、用件のすべてをお話し下さい」

ピーという発信音が山本の迷いを捨てさせた。

「山本蘇芳です。モデル料一日一万、宿泊費別途、交通費全額、新幹線、特急、グリーンいずれもオーケー。三日間の予定です。条件に合うなら、駅についてからでも結構、お電話下さい。迎えに行きます」

このあと念のために電話番号を入れた山本は、受話器を置くと額の汗を拭ってその場に座り込んだ。

何故か動悸が治まらないでいる。

留守番電話だったことがせめてもの救い、そう思う心の裏側で山本は、がっかりしている自分に出会つた。

『それにしても』

留守番テープの長さには限りがある。山本は、若い男のジイアに対する配慮を短いメッセージの中に見つけて舌を巻いた。

「来てくれればいいが」

二階のアトリエに戻るまでの間、そればかりを思った。創作意欲を湧き立たせる肉体だった。

今まで数えきれないほどのモデルが山本の前で脱いだ。しかし心底女を感じさせ男根を蠢(ふる)め(め)かしたの  
はジイアだけだ。

山本は知子の鋭い勘を恐れた。ジイアの肉体に知子の乳房を強引に接(つ)いでみせた所以だ。

山本はこの日、終日海を見詰めて過した。

山本の絵はほとんど売れない。

最初は静物を好んで描いたが額代がほとんど全額マインスになった。知子は山本のためにモデルを与えた。何作目かの『無言』(しじま)と題した油絵が新美会展に入選し、百二十万の値がついた。以後山本は、「裸婦」に画家としての夢を託して今日に至っている。

そういえば唯一の個展も山本蘇芳の力でなく、流行作家水島茜の前夫という話題性で開かれている。それでも即売できた作品は一つもなかった。後日、茜の出版関係者が義理で買いには来たが。

『まぐれの一作』

山本は長い間その中傷の渦中に居る。

「ほかの裸はだめ。ジイアって子にしなさい。私を混ぜたりしないで描くのよ。ギリギリした男の目で、おっ立てながら、その子の陰毛の一本一本に涎(よだれ)を垂らしながら、いいわね。つまらない遠慮や道徳観をカンバスに持ち込んだら最期、あなたの絵なんか誰も見やしないわ」

「わ」

知子が横浜に帰るその日の、駅で車を降りる間際の熱っぽいアドバイスもその辺が動機だろう。

山本は水平線の彼方の曖昧な空間に視線を移した。

「先生、来たわよ」

待ちに待った声が電話の向こうで弾んでいる。

連絡をしてから四日目の午(ひる)だった。

作務衣(さむえ)姿のまま車に乗り込むと体中から汗が噴き出した。カーエアコンが昔だけでその存在を主張している。少なくとも四十五六度はあるに違いない。ようやく頬に涼風を感じはじめた頃、山本は伊豆熱川駅に立った。

ジイアは一目で分った。

人、人、人の中で突出しているのだ。庇(ひさし)が波打っている大きな赤い麦藁、胸を被うブラジャーに似た赤い布切れ、赤い腕時計、ヒップラインを強調したこれまた赤いタイト、そして踵が十センチはあるのかという赤いヒール。夏の陽差しをどう避けてきたのか、抜けるように白い肌がそれを際立たせていた。

「早いよね、おトイレ行きそびれちゃった」

舌をちよろつと出してジイアは乗り込んできた。

「待ってるよ、行ったら」

身を振って山本は後ろのシートに沈んだジイアに言った。すらりとした脚の奥のパンティが眩しい。

「いいの、先生んここでする」

「だけど万一渋滞したら・・・」

事実、十分違いで二三キロ渋滞したことがある。

「平気よ、ここでするもの」

「おいおい」

「まさかア」

山本はさすがに馬鹿馬鹿しくなつてアクセルを踏み込んだ。

ルームミラーをジイアに合わせる。山本はそれだけでなく相手顔を見ずに話すのは苦手だった。

「恋人？」

「え？ なあに」

「いや、留守番電話に出た青年」

「ああ、亮のこと。何かなア」

「だつて同棲してるんだろ」

「同棲してると恋人なの？」

「夫婦もちろんそうだけど」

「決めないとダメ？」

「別にいいけど」

「何してるの？ 仕事。いや、彼氏さ」

「きょうの先生ってヘン」

『確かに』

山本は質問している目的に気が付いて黙った。

「ねえ先生・・・」

ジイアが甘えた口調で言った。

「悪かった。質問するのを止めたら話が続かなくなつて

ね。ご免」

「ちがうの。わたし、一週間位居ていいかなア」

「いいけど、彼氏心配するんじゃないか」

「してくれるといいな」

「おっと」

対向車が現れて山本は咄嗟にハンドルを切った。

『金だろうか』

モデル料一日一万として十四万、何かのためにそれくらいは必要。遊びに来ているわけではないのだから、ジイアの申出は、アルバイト期間の延長を意味しているに

違いなかった。

『今度の絵に賭けたい』

最初から三日で仕上がるとは思っていなかった。

「十五万近くになるけど、何か買うの？」

「うん、ちよつとね」

「また質問しちゃったな」

「ほんと」

ジイアはクスクス笑い出した。

「ジイアちゃん、正式には七日間ということだ」

山本はハンドルを握る手に力を入れ、精一杯胸を張っ

て言った。

「やったア。ねえ先生、先生って有名なんですってね、

号いくらのかな、あ、怒らないでね」

有名と言われて怒る馬鹿はいない。いかし号いくらと

はまた辛辣ではないか。山本の絵には未だ定まった評価

などないのだ。

「誰が有名って言ったの？」

山本はむしろそれが知りたかった。

「亮よ」

「例の彼氏か、絵をやるの？」

「好きだけど自分じゃ描かないみたい」

「その亮君、僕のことではかに何か言ってた？」

「しじまって裸婦が傑作だって」

また『無言』だった。

「ジイアちゃん……」

「呼び捨てにして」

ジイアは前にのりだすようにして言った。

「苦言を呈するけど」

「え？」

「いやその、号いくらは失礼だと思っ」

山本は左掌でツルリと顔を拭うと口を塞いだ。眼だけ

がルームミラーに写ったジイアを追っている。

「ごめんさい」

と、ジイアが頭を下げた。

山本は大きな溜息をついて左手をシフトに戻した。

「ジイア、今度の作品は大変だと思う。いやなポーズを

とらせるかも。覚悟してほしい」

口調が心なしか上ずっている。

「平気。お仕事だし」

「うん」

「先生好きだもん」

事実、ジイアは画家としての山本に好感を持っていた。フケだらけの髪に無精髭、目ヤニのこびりついた眼、不潔さをシンボルにする絵描きが多い中で山本は清潔で言わば普通の人だった。それでいてジイアのからだを男の眼で見詰めてくれる。

ジイアは晒している自分の肌を物としてみられるのが一番嫌だった。女として馬鹿にされたような気がするのだ。

アトリエに戻ると山本はジイアに二時間だけ仕事をさせてほしいと頼んだ。出来れば到着したその日ぐらい寛くつろがせてやりたかったが、何分にも気がせいた。ポーズだけでも決めたかったのだ。

知子は帰りしなに、銀行に立ち寄り百万という大金を山本に手渡しして、こう言っている。

「わたしのウンコみたいなものよ。気にすることないわ。だけどいい絵を描くのよ。警察からお呼びのかかるほど凄いのをね。捕まったら出してあげる。見る人が男も女もオナペットにしたくなるような絵よ。分ったわね」

山本も今度はあらゆるタブーを捨ててかかる気である。画家として背水の陣をしくのである。飲み食いから住居、さらにはセックスまで女に縋(すが)っているような現状には、さすがに忸怩(じくじ)たるものがある。山本は「まぐれの一作」という汚名を返上するためにも、今回に賭けていた。

「その前にシャワーいい？」

こくりと頷いたあとジイアが赤い腕時計をはずしながら言った。

もともと臍丸出しの水着のような格好なのだが、靴、麦藁帽子、腕時計と、場所を移しながら脱ぎ捨てていくジイアに、山本は生唾を呑んだ。階下にあるバスルームに向かう間に、からだに残っている布を一つ一つ取り去って行く気かもしれない。

「あとはバスルームに着いてから脱いでよ」

「残念でした、そうします」

ジイアは、いたずらっぽい笑みを浮かべて階段まで走った。

「一緒に浴びていいかい？」

山本の精一杯の照れ隠しだった。

「うん」弾んだ声でそう応えようとジイアは、胸を被つていた布を取り去って、山本の視界から消えた。

「やっぱり」

山本は白い歯を見せて笑った。

素裸のままアトリエに戻って来たジイアは、まず大きなカンバスを見て驚いた。

「ここにとりあえず座って」

山本は真紅の敷物の上にジイアを招いた。

「先生、今度の、大きいね」

「縦一メートル五十、横二メートル二十」

百号の絵ということになる。

「大体の構想を説明する。いいね」

ジイアは山本の変化に目を瞠（みは）った。しびれるような男らしさがある。

「まず第一のポーズは胡坐（あぐら）をかいた状態から左脚を無造作に伸ばして」

ジイアは指示通りに動き始めた。

「右手で上体を支え、のけぞり気味に、そう左手は悩まし気に頭へ、表情はアンニュイな感じで恍惚として」

「はい」

ジイアは二三の表情を作ってみせた。

「そうそう、そんな感じ。でもきょうはポーズだけで終るから。カメラアングルで言うど分りやすいかな。大きく開いた股からローアングルで乳房、顔。ジイア、写真家のところでモデルは？」

「ある、二三回」

「じゃ分るね」

「うん」

このポーズとアングルではジイアの恥部はカンバスの中心で丸出しになる。

「恥しいか、ジイア」

「ううん、平気」

「ありがと。じゃ、次のポーズ。正座してみて」

「はい」

「そこから太腿を合せたまま両脚を左に流して」

自然にジイアの上体は右に傾き、右手で支える必要がでてくる。

「その右手の肘で上半身の重さを支えて、顔をこちらに向けて妖しい雰囲気で舌舐すり」

「先生、もしかしたらクリニングスのあと？」

「そう。どうやら前のポーズと合成できたらしいね。ただ、そういう感じというだけでそのものずばりじゃない。クリニングスを知らない人にも興奮してもらわなくてはいけないから」

「そっか。でもせんせい、今度の凄いな」

「亮君」推薦の『無言』を超える作品にしたいんだ」

「はい、わたし何でもする」

「ジイア、肘をついた右手、指はどこへ行く」

ジイアは、微笑して前のポーズの陰部に触れた。

「左手は？」

当然前のポーズの左の太腿を開かせる働きをする。

「よし、決まった」

山本は会話する間も大きなキャンバスに挑み続けた。淡い油絵具で構図をとっていたのである。

「ジイア、君自身が濡れる気分で興奮してくれないと困るよ。僕はその気分をキャンバスに昇華させたいんだ」

「先生、見て」

そう言うと、ジイアは第一のポーズに戻って陰部を晒してみせた。

すでに光る液体で濡れていた。

「亮、元気にしてたア」

ジイアは一週間のモデル稼業を終えて帰ると、木賃アパートの鉄の階段を駆け登り、長田亮の部屋、二〇三号室のドアを勢いよく開けた。

「おかえり」の声に、脱ぎ散らかした衣類を目で辿ると浴室のドアにぶつかった。

「わ、いいんだ。わたしも」

「待てよ、すぐ出るから」

「いいから、いいから」

ジイアは素早く裸になると浴室に飛び込んだ。

「水、水。亮、早くボディソープ」

「こんな狭いとこ、割り込むなよ」

「狭いからいんじゃない」

亮は空つぼの浴槽に身を移して、ジイアにシャワーホースを向けた。

「バイトあった？」

ジイアは拝むようにして水を浴びながら言った。

「ああ、二日間だけな」

「今度は何？」

「ウイスキーの箱詰め」

「で、いくらなの、一日」

「いいじゃん」

「だめ。ねえ、ソープでこすって」

「ほら、後」

亮はジイアの向きを変えると掌で、液体ソープを泡立て始めた。

「女王様を磨くようによ」

「よく言うよ」

「くらくら」

「六千円」

「一ヶ月の売の稼ぎでお家賃やっとか」

「バストイレ付きにこだわったのはお前だぞ」

六帖二間バストイレ小さな流し付きで月八万円。横浜の神奈川区内だけに古くても決して安くはない。

「もういいだろ、出るぞ」

「バカね、前も」

「まじかよ」

ジイアは亮の方に向くと両手を挙げて催促した。

「はいはい、女王様」

「よし」

小ぶりだが形のいいジイアの乳房が揺れている。亮は、乳首に泡をちよんちよんと付けると「終りました」と敬礼して、ジイアの顔にシャワーを浴びせた。

「バカバカ、ちよつと待つてよ」

亮が笑いながらジイアの横をすり抜けて出ようとしたときだ。

ジイアの熱い裸体が亮に絡みついた。

「やめろよ、感じちゃうじゃねえか。未だ太陽が元気な

四時半だぜ」

「洗つて」

「自分で洗えつて」

亮はジイアの髪を後に引いて顔をにらんだ。

「え。涙……」

「洗つて。お願い」

「前はやなんだよ。おっぱいやらあそこやら。立つちゃうじゃねえか」

「だから、あそこ……」

「お前、まさか」

ジイアは激しく首を振った。

「ああいう絵を描ける男はそんなんじゃないやねえよな」

「亮、して……」

亮の胸で涙をこするようにしてジイアが言った。

「欲しいのお。して」

「何だか分からねえけど分ったよ」

そう言うとき亮は、涙をふきとるようにジイアの眼の上  
に唇を這わせた。

「カーテンしないと見えるよ」

玉のような汗を額につけたジイアが言った。

網戸一枚の向うに隣家の明りが見え始めている。外か  
ら中が透けて見える時間になっていた。

「俺やるから」

亮は前を隠しもせず、立ってカーテンを引いた。

「風、あったんだ」

「ほんと」

亮は揺れるカーテンに押されるようにして、ジイアの  
横に戻った。

「ふいてやるよ、汗」

「うん」

亮は傍にあったTシャツでジイアの汗を拭つていっ  
た。

「やだ、感じるウ」

「きようは何度でもしてやるぞ」

「ありがとう。でも、もう大丈夫」

「何かあったんだろ」

「それ、後で洗っとくね」

「いやらしいことでもされたとか」

「そんなんじゃない」

「ごめん、よそウ、こんな話」

「うん。それより亮……」

「何」

「いかないのね」

「ああ、女いかせるの大変だから耐えてる」

「嫌(や)なの？ 私の中で出すの」

「嫌なわけないだろ」

「じゃ何で？」

「女がいけばそれでいいんだ。男の射精の快感なんてウ  
ンコするのと大して変らないし」

「わたしの子供じゃ嫌？」

「美人だろうなア」

「男の子だったら？」

「いらぬい」

「女の子にするから出して。一緒にいこ」

「子どもなんて夢さ。フリーターなんて誰がつけたんだか、早い話が浮浪者だし。ここだって、お前がモデルで月収五十万ということで、やっと不動産屋が家主を納得させたんだ」

「ひやーっ、わたし五十万なの」

「一日二万で二十五日掛けてみるよ」

「そこまでアテにしないで」

「ジイアは起き上がって亮をつついた。

「方便に決まってるじゃん」

「いいわよ」

「え？」

「そのくらい稼いであげても」

「おい、よせよ」

「わたしのからだだからだでお金になるのって、あと二年でしょ」

「二十二だっけな」

「亮には頭があるけどわたしは空っぽだし」

「金に成らない頭だけだな」

「よし、やってみるか」

と、ジイアは力こぶを作ってみせた。

「確かにきれいだからだな」

「えへん」

「無駄な脂肪はいつさいないし、お肌はほのかにピンク色だし、あそこの景色も素敵だし」

「何だか気持ち悪い」

「やめよう、お互いに夢みたいな話」

「失礼ね、何よ五十万ぐらい。あ、そうだ」

「何だよ」

「ジイアは急に這ってバッグを取りに行った。

「後からも美人だよ」

亮は、ジイアの尻を眼で追って笑い出した。

「バカ、違うのよ、お金、お金」

亮は眼の前にポンと置かれた金をみて笑みを消した。

「三十万あるの、これ」

ジイアの声が終わるか終わらないうちに、亮の掌がジ

イアの頬を強(した)たか打った。

「痛あい」

ジイアの眼から大粒の涙が溢れ出た。

目の前に、「二人のジイア」が若い肉体を絡ませた油絵の大作がある。

山本は、ジイアが横浜に帰って行った日から三日三晩この絵の前から動かなかった。極度の放心状態といつていい。

二ヶ月ぶりにアトリエを尋ねて来た三井勘介は、ある意味で山本を救ったことになる。

「大丈夫か、山本」

三井の第一声がこれだった。

かなり憔悴(しょうすい)していた。

三井は抱きかかえるようにして車に乗せ、この地伊豆では大病院であるN大付属に運んだ。

点滴を繰り返して別荘に戻ったのが夕方の七時、ほとんど何も話すこともなく、山本は眠りに落ちた。

三井は所在なきにアトリエに一人入り、カンバスを覗き込むようにして見ている。

「何とまた淫靡(いんび)な」三井は思わず口にした。

「おっ」

下半身に勃起する力を感じて三井は苦笑した。

『そういえば暫くごぶさただな』

三井はアトリエの照明を絞り、カンバスの周囲だけに強い光を集めてみた。

「正式な出品ができるかなあ」

弁護士(べんごし)の三井は知っていた。かつて、シニールレアリズムに近い日本の画家が、写真主義に戻り、陰毛や陰唇までも描きこんだため逮捕された事例を。罪は刑法第七十五条の、猥褻(わいせつ)図画(わいせつとが)公然陳列(こうぜんちんれつ)罪だった。

『あらゆる絵画展に出品不可能(ひんがふ)だとしても』

と、三井は思った。この絵に高値をつける買手は必ずいる。『無言(むごん)』(しじま)の比ではない。いや、画の質、画に掛けた執念(しつげん)が全く違う。

「おっ立ったかい? 三井」

気が付くと、山本が階段の手すりにつかまって立っている。

「起きてきて大丈夫か」

「別に病人じゃないよ」

「それはまあそうだが」

山本が一步一步、確かめるようにしてキャンバスに近づいて来た。

「これ、画題は？」

三井は自分の股間を右手で押さえながら質(き)いた。

「入相の鐘」

「ほう、晩鐘(ばんしょう)ってことか」

「さすが法曹のはしくれ、教養が深いな」

「はしくれはないだろう」

三井は色をなした。

「生活保護を受けてる弁護士がどこにいる。はしくれでも褒(ほ)めすぎだよ」

「強者(きょうしや)の側に立たないと決めた結果だ」

「気に入った弁護しかしないなら、プロじゃない」

「おい、やめよう、俺の話じゃない。この絵の話だ。晩

鐘は一般的だが、入相の鐘は特殊だぞ」

「分ってる。ミレーの作品に晩鐘がなかったら、僕だっ

てそっちにしたさ」

「ミレーか、なるほど先口(せんくち)がいたか」

「画題はいいから絵の印象を聞かせてほしい」

山本は三井に座るよう促した。立っているのがきついのである。

「椅子、無いんだな」

「どうせ吊るしの背広じゃないか」

「現実(じゆんじつ)は常に辛辣(しんらつ)だな」

二人は笑って腰を落した。

「タバコ、いいか」

山本は黙って頷(うなず)いた。普通なら三井の神経を疑るところだが今回は助けられた借りがある。

三井は気持ちよさそうに煙を吐いた。

「いい女だなあ、一度でいいからやりてえな」

「それが印象かい」

「弁護は俺に任せろ」

「それも印象だな」

「ああ、危険(けんけん)の上もない絵だ。ヘアヌードなんか糞喰(くそく)らえだな。俺は自慢(こぼ)じゃないがその類(たぐい)の写真でエレクトロニクスしたことないぜ」

「ドイツ語はよせて、いかにもじゃないか」

「お前こそアレルギーは卒業しろ。学歴(がくれき)云々で悩むなん

て一昔前の図柄だぜ」

「別に悩んじやいないよ。ただ知子の教養の広さに比べて……そういう意識はある」

「知子さんと言やあ、お前、覆水(ふくすい)を盆に帰して、やりなおす気はないか。俺の思うところ彼女、未練はたつぷりだぞ」

「こつちがその気でも……どうかな」

「なんなら間に入ろうか」

「できれば……」

「うん」

「ほつといてほしい」

三井がフーツと息を吐いた。

「あちちち、山本、灰皿灰皿」

「その空き缶に、おいパレットはだめ！」

三井は大騒ぎしたあと吸殻を空き缶に投げ入れた。

「ところで三井、用事があって来たんだろ」

「ああ、それにしても熱かった」

「絵の話もいいけど、そつちを先にしよう」

山本には見当がついている。なにがしかの金の無心が目的であろう。すでに十数回に亘って『少額融資』をし

ていてその総額は二百七十万円に達している。もちろん山本には金がない。結局は作家永島茜つまり知子の金が動くのだが、三井にも多少のプライドがあつて、直接には知子に借金を申し込めないでいる。

では何故知子は三井の無心に応じているのか。その答えは知子自身の台詞に委ねよう。「医者と弁護士は友達にしておきたいわね」

二人の沈黙は「人相の鐘」が自然なものにしていた。ジイアが淫奔な顔でこちらをみている。

「また……事務所の家賃かい」

「(明察)」

横浜の鶴見にあるポロマンションだが、一DK、月七万で契約していた。それが「格安」とは不動産屋の言だ。

「依頼はないのか、全く」

「四本、先月な。その内二本は金持ちのボンボンが起した人身事故の弁護でな、どつちの事件でも被害者は死んでる」

「断った？」

「すまん、酒飲んでた上、助手席の女のおそこに指入れて運転してたんでな」

「どっちも？ まさかな」

「似たりよつたりの事例」

山本は肩を落した。

「納得？」

「まあね」

「じゃ十万、この通り」

三井は両掌を合せた。おそらく旧友にだけ見せるしくさだらう。

「あと二つの事件は？」

山本は説明をもとめた。自分の金を貸す訳ではない。知子には全てを晒さないまでも合理的な説明はしたい。

「マル暴がらみでね」

「暴力団？」

「どっちに転んでも命が危ない。さわらぬ神に何とかやらで」

「分った」

山本は知子が絵のために置いていった金の中から渡してやろうと思った。半分以下の資金で作品はここにくうして出来上がっている。

『知子には言っま』

旧友に対する知子の印象を、いま以上に悪くしたくない。

「いつも悪いな」と三井が腰をあげた。

「何だ帰るのか？ 現金な奴だな」

「まだやるんだろ」

三井はカンバスを顎（あご）で指した。

「終った。あと二三日放っておいて見直すけど」

「熱い目は客観性を欠くってわけだ」

「鋭いんだな」

「お前、セックスしたのか？ そんな気がするんだけど」

三井はカンバス上の陰部に指を触れた。

「えげつないな、法律家は」

「被告人は質問だけに答えるように」

「バカ」

山本は曖昧に笑った。

「俺だって自制できねえよ、きつと」

三井は、山本の耳に届かないような小声で言った。

「和姦だろうな」

「うん？」

「あ、いや……」

『万一告訴されたら俺が扱ってやろう』

三井は笑って金の催促をした。

「こいつ」

山本は出された三井の掌をポンと叩くと「下の寝室にあるから」と階段を降りて行った。

「持つべきものは……」

三井はカンバスのジイアに視線を移した。

「……友と……女、か」

階下で電話が鳴って、すぐ止まった。

「ほんとにそそられる」

三井は「ジイア」の陰部に唇を寄せると、舌でペロリと舐めた。油絵具の香りがツンと鼻をついて、後悔が胸をよぎった。

「三井！」

ビクツとして三井は、絵から後へ飛び跳ねた。

「冗談だよ」

見られたという思いが額（ひたい）に汗を呼んだ。

「訴えてきたよ、僕を、例の亮（りょう）君だ、ジイアの男、どうしよう……」

山本は顔を真っ青にしている。

「今の電話か」

「うん」

「出ようか」

「切れた。怒ってる」

「落ち着け山本、俺は弁護士なんだぞ」

三井は、頭を抱えて座り込んだ山本の肩を揺すり続けた。

知子のマンションは横浜の金沢にあった。むろん三井にとっては初めての訪問である。元は海岸だったらしく横一列の松が昔を偲（しの）ばせている。マンションの周囲の土にも砂が混じり込み、吹く風も潮気を含んでいなるほどと思わせる。

背丈の低い四階建てで、知子はその最上階の一号室に居た。

インターホンを押すと、何と若い男が出た。

「おやおや」と鼻白む思いの三井だったが、出版社の男性社員と知子に聞いて、今度は自分の下種腹（げすばら）に嫌気がさした。

「永島茜番というわけですか、彼は」

「そんなところかしら、可愛いでしょ。二十三ですって」  
新卒が番では大作家ではない。三井は妙に安心した。  
「二人きりになったわよ、何かしら」

知子は、三井の訪問が借金のためでないことはすぐに分った。三井の所作に落ち着きがあるからだ。

「実は、山本蘇芳こと山本治（おさむ）氏が強姦で告訴されることになりました」

「強姦、ですか」

「猥褻図画云々ではありません」

「それなら私も山本にけしかけたくらいだから分るけど…… 一体誰を、かしら？」

「今度の彼の傑作、入相の鐘のモデルです。場所はあなた所有の東伊豆町北川（ほっかわ）のアトリエ」

「傑作。三井さんがご覧になっての傑作？」

「え、ええ」

「そう、よかった」

知子はソファーに凭（もた）れて安堵の溜息をついた。

「あの、ですねえ」

三井は知子の反応にとまどって、身をのり出した。

「よろしいでしょうか、強姦で」

「嘘よ」

知子は凜（りん）として否定した。

「山本に女を犯すような強引があれば、とつくに世に出てるわよ」

「そっちですか。しかしそうおっしゃられても」

三井は困惑した。

「三井さん、告訴は正式なもの？」

「正式とは」

「強姦罪って致傷（ちしよう）や致死（ちし）が付かない限り、被害者の告訴があつて初めて論じられる、つまり親告罪（しんこくざい）よね」

「お詳しいことで」

「つまらない小説書く都合上少しは」

「で？」

「ジイアつて子から告訴されたのかしら？」

「いや、現在のところは長田亮（おさだ・りょう）という男が、山本さんを告訴する旨（むね）電話で通告を」

「告訴させる旨ね、その男の人には告訴権はないわ、ジイアつて子に告訴させるしか手段がないはずよ」

「ですから細かな議論は別として、告訴された場合の弁

護人を私に、と。これは山本氏のたつての希望でして、この件についてあなたの「承諾を戴きに」

「なぜわたしに」

面倒な女だと思つた。言わば山本のパトロンだから、弁護料の最終支払人だからわざわざ来ているのだ。杓子定規に言えば、山本が誰を弁護人を選任しようが知子の知つたことではないぐらい百も承知だ。

知子は三井の舌打ちを見て、目許(めもと)を痙攣(けいれん)させた。

『一言ぐらい借金の礼があつてもいいのに』

三井は、弁護料支払の方向では山本と知子の特殊な關係を前提に承諾を求めてきながら、借金弁済の方向では山本と知子を切り離し、事実上の消費貸主(しようしかしぬし)たる知子を、無關係と割り切つて礼一つ言わぬい姿勢で臨んでいる。知子にはその下種(げす)つぽさが腹立たしい。

「もう言葉の遊びはやめましょう」

知子は大人に戻つて言つた。

「山本の弁護、そのときはお願いね。請求はわたしに」  
「確かに承りました」

「じゃいいかしら、締切が近いものですから」

「どうぞ、すぐ失礼しますから」

貧すれば鈍すだった。検察官にも司法警察員(しほうけいさいいん)にも告訴が為されていない段階での訪問に迫力も説得力もあつたものではない。仕事に飢えた弁護士のみじめな売り込みに墮してしまつた。三井は机に向かう知子の後姿をみながら立とうともせず、自分の世界に沈み込んだ。

何分経つたらうか。

「いい加減になさいな」

我に還ると女の白い脚が二本立っている。

「つい居眠りしちゃつて……」

確かに一時意識が薄らいだように思う。

「警察呼んでもいいのよ」

ムツとした三井が顔をあげると、お盆を手にして微笑(ほほえ)んでいる知子がいた。

「冗談きついですね」

三井は頭を搔(か)いた。

「暑いし、ちよつといかが」

持つて来たのは瓶ビールにグラス、それに塩(しほ)ピーナツ

ツだった。

実は知子も短時間に考えなおしたのだ。

三井の経済的苦境は山本から聞かされている。その無心に応じてきたのはこういうときのためではないか。それを辱(はずか)しめて追いついて何になろうか。三井以上に山本を理解している男は居ないし、これからも出ないだろう。最良の弁護人には違いないのだ。

「いいですねえ。しかし……原稿の方は」

三井は、大形に知子の文机(ふづくえ)の方に身を振(よじ)つてみせた。

「いやねえ、見栄よ、見栄。はい……」

知子はビールを勧めた。

「意外だなあ」

グラスを持って三井が言った。

「イメージと違(ちが)うってこと？」

「ちよっと。さっきまでは予想通りだったけど」

三井の口調に馴(な)れが入(い)ってきている。

「反省(はんせい)してます」

崩(くずれ)さば崩(くずれ)せた。知子も肩の力を抜いた。

「先生、今(いま)独身(ひとり)なんですって？」

「山本の奴(やつ)喋(しゃべ)りましたか。いわゆるバツイチ(離婚)でしてね。

四年前(よっせんぜん)、逃げ(にげ)られてやむなく離婚(りこん)」

三井がグラスを干(ぬ)して、知子がビールを注(つ)いだ。

「やむなくってところが曖昧(あいまい)だわね」

「やめましょう、こんな話(わ)」

「何(なに)となく興味(きょうみ)ある」

「小説(しょうせつ)のタネ(たね)ってわけかな」

「お子(こ)さんは？」

「戸籍(こせき)課(か)でなく福祉(ふくし)課(か)へご案内(ご案内)」

「ビール、沢山(さわ)冷(ひや)えてるから」

知子(ちこ)は、身(み)軽(かろ)な動作(どうさく)で追加(ついか)のビール(びーる)を運(は)んできた。

「はい、先生(せんせい)。でも福祉(ふくし)課(か)としてもお子(こ)さんのことを伺(うかが)いませんと」

「さすがにお上手(うまい)だ」

「職務(しやくむ)です。当時(たうじ)英里子(えりこ)さん(せん)はおいくつでした」

「なんだ、知(ち)つてるのか」

急に(急に)三井(さんせい)は冷(ひや)めた声(こゑ)に戻(もど)った。

「知らないわ、何(なに)故(ゆ)冴子(さへ)さんと別(わか)れたのか、なぜ英里子(えりこ)ちゃん(せん)が家(い)を出(で)してそのま(ま)まなのか」

「山本の奴……」

三井はビールを呷（あお）った。

「山本を責めないで。弁護士という紳士録にも載る職業のあなたがお家賃にも困ると聞いて、ほんとかしらと思ひ山本に問い詰めたのはわたしよ。山本はお喋りではなくて、それこそやむなくわたしに説明したの」

「じゃ聞くなよ、もう」

三井は言葉を荒げると、知子からビールを奪い取った。

「いま言った情報が全てよ、山本はそれしか言っていないし、それ以上聞くなつて」

「嘘つけ、二人して笑ひ者にしてるんだろ」

「先生」

「やめろ、茶番は。何が先生だ」

「じゃ言わして。何があつたか知らないけど、甘ったれるのもいい加減になさいな」

「金ならきつと返す」

「そういうことじゃないの」

「今でもなア、その筋の弁護してやれば二百や三百の万札は手に入るんだよ」

「じゃやれば？」

「できるか。何のために法律を学んだと思つてる」

「正義？」

「ああ」

「弱者の救済？」

「ああ」

「じゃやれば。正義を護るにもお金がいるわよ、生活保護を受けて護れる正義って何かしら。あなたが救つた弱者が、汗水たらして稼いだお給料からも引かれる税金、あなたは結局それを横取りして生きてるのよ。蒼黒い感傷で、世間の同情をひくというおまけつきでね」

「何がわかる、三文文士に」

知子はしまったと思つた。ここで辱しめて何になると反省したはずなのに。

「何が分るつてんだ」

三井は小さなテーブルを蹴散らして知子に組みついた。

「あなたは弁護士なのよ！」

「目の前で、やくざに女房を犯された男の、はじめさが分るか、十八になつたばかりの英里子を、目の前で犯（お）かされた親のみじめさが分るか」

「落ち着いて、苦しい」

「ヤッパ一つ首に付けられて、ブルブル震えて、見てい  
るだけだった俺の！ どこが弁護士なんだ、ええー」

知子の目が驚きを露にした。三井の右掌（みぎて）が  
知子の恥部を強く押ししたのである。

「ところが、犯された女の方は、それ以上に傷付いたん  
だよ、それも分つてんのか、え、小説家さんよ」

三井は小さく笑った。

「わ、わ、…」

「何？ 先生様、言つてみるよ」

知子は喉（のど）の自由を得た。

「分るから勘弁して…」

あとは咳き込んでもがいた。前止めのボタンが飛び散  
り、肩から胸、太腿（ふともも）、あらゆるところが露出  
した。三井の視線が知子の動きを追っている。

「分るんだな」

「ええ、だから」

「分るもんか、この嘘つきが」

知子は直感した。

『犯す気だわ』

下着が強引に剥ぎ取られていく。

「嫌。正気になって。あなた何してんのか分つてるの。  
弁護士がこんなことして」

「弁護士なもんか」

「志の大きき、司法試験、修習生活、二回試験、ねえ、  
思い出して、全部ムダになるのよ、やめて、いやだつて  
ば」

知子は、臍内に熱いものを感じて目を瞑（つむ）った。

「こんなことをしてこのまますむと思つてるの」

ワンピースのボタンを掛けながら知子が言った。

「告訴しますか？」

ビールをラッパ飲みしながら三井が答えた。

「多分ね」

「あのとき、女房と娘を犯したのは俺なんだ」

「え？」

「あれが共犯でなくて何だろう」

「そういうこと…」

「何も出来なかつた」

「誰だつて命は惜しいわ、私だつて…」

殺されるよりは犯されたほうがいい。事実、知子はそう思った。

「失禁した……自分の小便が脚を流れ落ちる不快感……毎晩それとどび起きる……もう沢山だ」

知子は、身繕（みづくる）いをする三井を静かに見ていた。

「裁かれない」と、三井がまともな顔で微笑した。

「楽になりたいんですよ」

「そのためなの？」

「告訴、待ってます」

三井は知子に一札すると、よろけるようにしてドアに向った。

知子は天井を仰いだ。

「レイプか……」

『この体験、使えるかしら』

三井が出て行く音がした。

「人生の入相（いりあい）、何だか哀しくなってくるわ」  
知子の虚脱感（きだつ）は、怒りさえも被（ひ）い尽くしてしまった。

三井はジイアの本名も住所も知らなかった。

それでいて知子に売り込みに行ったのだ。これが自嘲（じちやく）せずにいられようか。

三井は、「俺はもう駄目になっている」と、自ら思い知った。

知らずにした弁護活動だったが、被告人が刺し殺した相手が抗争中の暴力団の組長ということで、あの忌まわしい事件が起った。以来、三井はアルコール依存の日々を送っている。弁護士の仕事、それ自身が恐怖の対象になった。今回の山本の弁護は、レイプした方の側に立つのだから三井の心情の逆を行く。しかしだからこそ、三井は立ち直るきっかけをそこに求めた。それは勇気ある心の外科手術になるはずだった。

『ともかくジイアに会わなくては』

三井は先ず山本に連絡を取った。知子の出方を探る意味もある。山本の応対（おうたい）に変わったところはなかった。

『流行作家の対面か』

覚悟した身にはどちらでも、とは思いながら一縷（いちろう）（いちぢう）の望みを託す三井だった。

電話番号から住所を捜すのは意外に難しい。山本は画材店の場所を三井に教えた。ジイアを紹介した以上、何

らかの繋りがあると思つたのだ。しかし店主の口は予想外に堅かった。モデルを個人的につけまわす事例が相当あるに違いない。

三井は、遠回りをやめて直接電話をすることにした。コールしている音が、そのまま胸の高鳴りとを重ねた。

『四十四だぞ、バカヤロが』

三井は自分自身を怒鳴つた。

「はい、長田です」

若い女の声である。

「弁護士の上三井と申します。失礼ですがジイアさんでしょうか」

「はい、ジイアはわたしですけれど」

僅かだが、ためらいの時間をおいてから返事がきた。

「突然ですがお会いできませんか、いえほんの一時間ほどで結構お手間は取らせません」

「何かなあ、ちよつと迷惑」

「依頼人の件では非」

「お客さん来てるしいい、やだなあ」

「私の方から伺つてその方が帰られるまで待ちますから、

取りあえず住所と最寄の駅を」

「誰から？」

電話の向こうで男の声が出た。

『長田亮だな』

三井は見構えた。

「生理だから嫌なんだ」

聞き取りにくい会話の一部だけが妙に近い。三井は無視された一分ほどの間に苛立ちを募らせた。

「もしもし、ジイアさん、もしもし」

「誰なんだあんた、切るぞ」

「待つた待つた、山本蘇芳を告訴する件！ 私は弁護士。ちよつとお話できませんか」

切れはしないものの、電話の向こうは黙つた。

「誤解しないでほしい、私はジイアさんの方に付きたいと言つてるんです」

「待つてましたよ、すぐ分りました？」

三井は机の上の請求書をかき集めると手前の抽斗（ひきだし）に押し込んだ。

亮はジイアの背を抱くようにして立っている。

三井は初対面の二人に目を瞠（みは）った。映画ですら叶わないほどの美男美女なのである。めりはりの効いた端正な顔立ち、長い上下肢、揃って痩身、しかもつくべきものがつくべきところにつき、出る場所には出て、二人とも理想的な体型をしている。

「電話ではいま一つな感じで、とにかく来ました」

「どうぞお掛け下さい」

三井は二人に椅子を用意した。

粗末な法律事務所だった。

判例集や六法がなければ田舎の芸能プロのそれに近い。亮はジイアの付き添いで二カ所ほど見ている。

「女の子の使いに出してましてね、何もできませんが」

三井は意味もなく額（ひたい）を袖口で拭った。

「お構いなくって言うのかな、こういうとき」

亮の言葉にジイアがクスツと笑った。

『山本の気持ちがある』

妖（あや）しい魅力があるのだ。それでいてどこか幼い。

「ジイアさんは本名ですか」

「ハーフか、少なくともクォーターに違いないと思った。

「大野千秋です」

ジイアはペコリと頭を下げた。

「弁護士の上井勲介です」

名刺が一枚、亮の前に置かれた。

「怪しい者でないことが分かって戴けて幸いです」

「それはまだですが」

「きついな」

三井は一瞬強張（こわば）ったが、すぐに気を取り直した。とにかく目的は果さなければならぬ。

「ジイアって」

「はい？」

「いやごめん、意味を質（き）きたくて」

「亮じゃないと」

ジイアは亮（りょう）を肘でつついた。

「何語ですか？」

「日本語です。あいまいとか不安定とか、この子を言い表すのにぴったりだったんで。本当は次（じ）と亜（あ）、

つまり次亜（じあ）なんだけど、呼ぶにはジイアと伸ば

さないと可愛くないから」

「なるほど、不安定ねえ」

三井は、ピタリと合わさったジイアの膝を見た。

「同じ元素の酸素酸(さんそさん)のうちで酸化の程度が低いものに次を付けるんです。更に低いものに亜、最も低いものが次亜、だからジイア」

「塩酸ジアセチルモルヒネなんかもそうかね」

三井は、記憶にある判例から引き出して言った。

「それはヘロインのこと。その場合のジはモノ、ジ、トリ、つまり一、二、三の二のことで全く違いますね、一番身近なのは水道水の浄化に使う、液体塩素、次亜塩素酸ナトリウムかな」

「君は化学(はけがく)専攻？」

「いえ、バカ学生でした」

ジイアは肩をすぼめて笑った。

三井はどうも苦手であった。緊張や警戒心を解こうと努力している自分が惨めになってくる。こうなると遊ばれているとしか思えない。

「さてそのジイアさんが、画家の山本蘇芳に犯されたというのは本当かね」

三井はつき合いきれずに本題に入った。

ジイアは亮の顔を窺(うかが)った。

『これは本当かもしれない』

三井は初めて山本を軽侮した。レイプされた女が真実を語り、告訴をしようとするとき、真っ先に気遣い、許しを求めるのは恋人であり夫だろ。三井はいま、それを見ているのだ。

長田亮はジイアの目を見て頷(うなず)いた。

「はい、先生のアトリエで」

そのあとの沈黙は、ジイアの受けた傷の深さを物語っていた。

三井は娘の英里子の泣き叫ぶ姿をジイアに重ねてみた。涙が自然に流れ落ちた。

亮は眉一つ動かさずに三井を観察している。

「告訴すべきだと思っ」

三井は声を詰らせながら言い切った。

「先生がジイアの代理人に？」と瞬(しばた)く亮、ジイアの潤んだような瞳が三井を見詰めている。

「そのつもりで電話して、ここにも来て戴いたんだが、どうも誤解があるようで」

亮は小首を傾(かし)げた。

「山本蘇芳の弁護は降りました。あまりにひどい話なん

でね。私にもジイアさんと同じ位の娘がいる。私の正義感が許さないんですよ、今度の事件は」

「先生は山本蘇芳とジイアのこと、蘇芳本人から聞いたんですよね」

「そう、それで驚いた。無名に近いとはいえ四十五にもなる画家が、こともあろうにモデルをレイプするなんてジイアさんの告訴は、大勢いるであろうモデルさんたち全体の人権を護るためにも有意義なんです。だから私も手弁当でこの件に尽力しよう」と

「ちよつとまって」

亮は両掌で三井の話を止めた。

「何か」

「そうだとすると、先生はジイアの代理人になれないと思っけど」

三井の眼尻がピクツと動いた。

「弁護士法二十五条があるから」

三井は亮を甘く見ていた。

『弁護士は、左に掲げる事件については、その職務を行つてはならない。』

一 相手方の協議を受けて賛助し、又はその依頼を承

諾した事件。

二 相手方の協議を受けた事件で、その協議の程度及び方法が信頼関係に基くと認められたもの。』

三井は重要な部分を中心に唱えてみた。この場合「弁護士」が三井、「相手方」が蘇芳、条文に表れない事件の依頼人がジイアとなる。

亮はこの条文を知った上で三井に迫っている。

「未だ正式に承諾したわけじゃない。蘇芳から話は聞いたが、もう一つ乗れなかった」

山本と三井の旧友関係を知らない亮に対しては、前に示した一を否定すれば足りる。しかし三井は動揺を隠せなかった。

『正式な告訴だけは、させなくちゃ』

所期の目的はそれで達せられる。その先の裁判の行方など、どうでもいいのだ。三井は心の中で再確認をした。

「ジイア、帰ろう」

亮は立ち上がって言った。

三井が口をパクツとして見上げている。

「いいの？」

「ああ、この先生じゃ戦えない」

ジイアが身をすくめて、亮の腕に縋（すが）った。  
無能の意味にとった三井がムツとしたのである。

「じゃあ、君たちはどうしてここへ」

「先生の顔を見て、先生を知る必要があったから」

「初めから私を蘇芳側と見ての値踏みかね」

「いえ、電話の主はうちの電話番号を知ってるわけでしょう、会つてはつきりさせとかなないと、何度でもジイアを呼び出そうとする、だから。違つたらごめんなさい」

三井の脳裏にカンバスのジイアが浮かんだ。

『確かにそうしたらろうよ、俺のことだ』

「先生、今の警告だから。ジイア、行くぞ」

「うん」

三井はほとんど無意識に俯（うつむ）いた。

二人が出て行く音がした。

三井は急に振り返つて嘲（わら）い出した。

「あなたの大切なジイアさんにお会いしたいんですけど、許してくださいさる？」

電話でそう切り出した知子に亮は、「許すとか、そんなもんじゃないから。本人に聞いて」と疑うそぶりもな

かった。

「女だから、かしら」

特急踊り子号の中で、知子はそのことに触れた。

「いつもそうです、亮つて縛（しば）らない男（ひと）だから」

「それじゃあ、相手が誰からでも平気なの？」

「そうだと嫌（や）だなあ」

ジイアは、自分のために三井弁護士をやりこめた亮を想い、胸を熱くした。

「名前とか用件とか聞かないうちによ」

「亮はねえ……」

知子は覗（のぞ）き込むようにして頷（うなず）いてみせた。

『可愛いわ、この子』

横浜駅で待ち合わせた二人だが、知子のジイアに対する印象は先ずそれであった。言葉、仕種（しぐさ）、それらに屈託がないのだ。確かに男なら強（し）いて犯しても欲（ほ）しかろうと思う。しかしそうされたこの子が、人を憎（にく）み、醜（みにく）い争いの中に身を投（な）じるとは思えない。

『この子なら告訴しないのでは』

知子は淡い期待をもった。

もともと雑誌社から依頼された取材旅行だった。原稿用紙十枚の枠で作家にとっては遊びのようなルポ、知子は受けるとすぐに、ジイアを誘うプランを練った。ジイアがどんな子か、知子は興味津々だったのだ。

「茜先生からきつと連絡あるって言ってた」  
「だって、ええ？」

山本と自分の関係を亮が知っているはずがない、と知子は訝（いぶか）った。

「なぜ、亮さん、そう思ったのかしら」

「蘇芳先生の元の奥さんで流行作家だから」  
ジイアはざらりと言った。

知子は凍る思いがした。もしかしたら全てが、練（ね）りに練られた計画なのかもしれない。そうだとしたら、『まとまったお金が要るかも』知子は、スツと心の中で身を引いて、ジイアを見た。

「でも変ねえ、余り知られていないのよ」

「亮ってスゴイんです」

「そうみたいね」

「二年前に『紅（くれない）画廊殺人事件』て本があっ

てえ……」

「わたしのだわ」

「なんか後の方の解説に、蘇芳先生のことを詳しく書いてあるって」

そう言えばあった。『主人公二人の関係は、著者と画家蘇芳との関係を彷彿（ほうふつ）させるものがあって興味深い』云々と。

「わたし本なんか見ないから全然知らなかった」

「ねえ、亮さんが私から連絡あるって予想した理由、あなたに詳しく言わなかった？」

知子は、作家としての興味を強くして言った。

「正確には憶えてない」

「大体でいいわ」

「蘇芳先生と茜先生は心を一番大事にする関係だから、何があっても茜先生は、蘇芳先生を信じて守ろうとする。そんなこと」

『この子たち一体何者』

知子は指摘の鋭さに驚いた。しだいに精神的な優位性が薄れていくのを感じた。特に、ジイアの背後にいる亮という若い男に対して。

特急が海を見下ろす小さな駅を通過した。

「山本のアトリエは、ここで降りるのがほんとなの」

「伊豆北川」

「あなたは二度とも次の熱川だったはずよ、ここ特急停車しないから」

「はい、先生が車で迎えに来てくれて」

「あら本当、私なんかいつもタクシー」

知子はおどけて、ウインクをしてみせた。

目的地は下田であったし、切符も下田まで買っていた。今の今までそのつもりでいたのだが、「ねえ、アトリエに寄って行きましょうか」と、知子は自分でも意外な言葉を口にしていった。

「賛成え、うれしい」

何のためらいもなく、それどころか大はしゃぎで喜ぶジイアを見て知子は、すでに自分が古いタイプの人間であることを知らされた。

「先生、大風呂、今なら誰もいませんから、お妹さんとごゆっくりお入り下さい。中から鍵もできますし」

敬語の重複などいっこうに気にならないのが旅館というところだ。知子は、流行作家永島茜として泊まっている。画と写真が主で全国の宿泊施設を紹介する雑誌『旅行画報』の編集部の手配なので、知子はVIP扱いだった。

「仲居さん、あなたのこと妹だって」

「失礼しちゃうわ」

「ええっ、それって何？」

「うぬぼれです、わたしの」

「まさか娘さんはないわよ。私ジイアを十八で産む勘定よ、ちよっと」

「でも、ありそう」

二人は浴衣の袖を引っ張り合って笑った。

湯気が渦を巻くようにして湯面を撫でてゆく。

汗が二人のそれぞれの肌を走り落ちてゆく。

天井に吊るされた傘の朱色が二人の頬を染めている。

静かだった。

浴槽の縁に、作家とモデルが並んで腰かけている。

「山本ね……」

知子がジイアの下腹部を見ながら言った。

「あなたに夢中みたい」

「うそ」

「私が傍に居るのに全然見てないの」

「だって茜先生には心の関係があるし、それに、わたし今日、モデルじゃなくて茜先生のお客様だったから」

『ありがと、ジイア』

「あの別荘がわたしのだつてこと、生活もわたしのお金で成立つてること、罪を犯してわたしに面倒をかけてること。絵具もカンバスもわたしのお金で」

「もうやめて先生」

「そんなこだわりや遠慮なんかこれっぽっちも見せず、堂々とあなたを見詰めてた」

知子の指がジイアの恥部に触れた。

「憎らしいわ、あなたの若さが」

「茜先生……」

「山本のペニスが入ったここが」

ジイアは唇を小さく噛（か）んで耐えた。

「何よりもあの絵ね。あれが愛でなくて何なの？ 山本の想いが描かせた傑作、わたしのお金が描かせたんじゃないわ、それだけは確か……」

ジイアは知子の声の変化に気付いた。

知子の頬を涙がつつたっている。

「あなたには悪いけど、強姦ならいいの、どんな事をしても償ってあげる、でもね」

「いや、思い出させないで」

「和姦なら哀しすぎるの、わたしが。あの絵を見てそう思った。告訴してジイア、愛がなかったって言つて。お願いだから……このとおりよ……」

知子はジイアの太腿（ふともも）に手を掛けたまま、深々と頭を下げた。

「いやア、そんなのつてない、みんな変よ、変」

浴槽の中に滑り込んだジイアが、狂つたように足をはたつかせた。湯しぶきを浴びながら知子は、涙を拭い取ると、穏やかな目に戻つてジイアのからだを追つた。

湯船の中の髪と陰毛の黒の動きが止まり、ジイアが浮いて来た。

『死のうかなあ』

ジイアの眩（つぶや）きが聞こえるような気がした。「そのままできて。もっとよく見せて」

知子は、浴槽の中で立ち上がったジイアに言った。

膝から下が温泉の中に隠れているのに、何と腰の位置が高い所にあることか。紅潮して幼さが倍化した表情。薄桃色に染まって輝いている肌。たおやかな縦のライン。煽情的な恥毛。そこそこに感じる女としての産毛が誇らしげに迫ってくる。

「茜先生、あがらせて」

口許の汗を舌で拭ったあとで、ジイアはフーツと大きく息を吐いた。

知子は黙って頷（うなず）いた。

燃えるように熱いからだ横に座った。

知子は脚で湯をゆつくりとかきまわしながら、静かに詠（うた）うように島崎藤村の詩を引いた。

『君こそは遠音（とおね）に響く

入相（いりあい）の鐘にありけれ

幽（かす）かなる声を辿（たど）りて

われはゆく盲目（めしい）のごとし』

あの時……

山本とジイアは見詰め合ったあと、どちらからともな

く抱き合った。ジイアの頬には涙が止め処（どこ）もなく流れ、山本はジイアの髪を撫で、その涙を唇で吸って応えていた。知子はただ立ち尽くし突然美しい光景に触れたかのように息を呑んだ。

『君ゆえにわれは休まず

君ゆえにわれは仆（たお）れず

嗚呼（ああ）われは君に引かれて

暗き世をはつかに搜る』

ジイアの瞳に山本のペニスが入ったかどうか、そんな次元での嫉妬が入り込む余地のない抱擁であった。知子は大きく眼を開き、今自分が見ているものが何なのかを、哀しみの中で確かめていた。

詩を聞いているジイアの眼が潤んでいる。

『吾足は傷つき傷（いた）み

吾胸は溢れ乱れぬ

君なくば人の命に

われのみや独（ひとり）ならまし』

知子は一人歩を進めてキャンバスの前に立った。  
『やっと出したわね、あなたの全てを。かつて放埒（ほうらつ）さのない芸術なんてなかったわ』  
知子は心の中で山本をしっかりと抱きしめた。

「あな哀し恋の闇には

君もまた同じ盲目（めしい）か  
手引せよ盲目の身には  
盲目こそうれしかりけれ」

詠み終わると、ジイアがからだを寄せてきた。

「茜先生ごめんなさい」

「ううん、逆よ、感謝してる」

「ほんとに？」

知子は微笑と共に頷いた。

ジイアの唇が知子の唇を吸った。最初はためらいながらも、次には優しくまとわりついて、そして大粒の涙と共に。

「山本は恋をしたのよ」

ジイアが引いた後で、知子は呟（つぶや）いた。

「もう二度と出来ないほどの大きな恋を……その悦びの聲が……あの絵から聞こえてきたわ」  
天井からの雫（しずく）が、二つの裸の間で音を立ててはじけた。

「三井弁護士はジイアちゃんに告訴させればそれでよかったの。告訴自体が目的よ」

知子は、煙草を吸うと、苦（にが）い顔で煙を吐き出した。

「代理人になって、弁護士を取って、そういう気はなかったの」

「最初から？ 変だな、それって」

亮がコーヒーに目を落としながら言った。

「もちろん途中からよ」

ジイアが山本を告訴すればマスコミがとびつく。永島茜の名がそれを必然にする。そうなるから知子が、三井を強姦罪で告訴する確率はゼロに近い。それでなくとも、弁護士が流行作家を犯すなど、世間では到底ありえないことなのだ。

もちろん亮にこのことを話す必要はない。

知子は伊豆からの帰路、ジイアに亮宛のメッセージを託した。

『きつと彼は来る』

知子の確信は現実のものとなった。もう二十分も話したことになる。殺伐とした話題を除けば、デイト気分もあつて知子は内心弾んでいた。

「醜悪だったな、彼」

「いろんな人がいるものよ」

「俺、バカって嫌（や）なんだ」

「若さが言わせる台詞ね」

「バカな政治家、バカな社長、バカな弁護士」

「バカな作家」

知子の返しに、亮はハツとして頭を掻（か）いた。

「そういうとこ可愛い」

知子はクスツと笑った。

「茜先生」

「はい？」

「まいったな、ジイアだよ、これじゃあ」

「うれしいわ、二人とも素敵なんだもの」

知子は心底そう思っていた。

「お金、そんなに欲しいのかなあ」

「どういうこと？」

「駅のゴミ箱をめざす小説やめてくれる」

「辛辣（しんらつ）ねえ」

知子はあまりの率直さに思わず笑った。

「初期の頃『傀儡（くぐつ）』って遊女を扱った作品、中間小説として賞とったけど、あれ純文学だよね」

知子から笑いが消えた。驚いたのだ。

「知らないわよ、ふつう」

「俺、永島茜のオタクだから」

山本と知子の心の関係をジイアに語った亮である。確かに一般的な読者ではない。

『やっぱりあらゆる事件の黒子（くろこ）は亮君？』

知子は、自分があやつり人形のように思えてきた。

「殺人ものはわたしの嘘の世界だし、いつかは厭（あきら）まれるわ。でもね、こういうことは知って欲しい。作家の価値を、当の作家以外の人間が決めるのは、過ち

を犯すに等しいってこと。多くの作家は現（いま）の自分とは違う世界現、受けている評価とは違う価値があ

ることを、他の誰よりもよく知っているものよ」

「でも、お金が入ると人間変るし、純粹なもの書くには結構エナジーいるし」

「意外と崖っぷちまで追い詰めるのね」

知子はロビーの外に眼をやった。海と空の青をベイブリッジが二分している。

「北川の海も横浜の海も同じね」

「心の海も」

「あら詩的ね」

「ブルーだから」

「若いのにユーウツなの？」

「若いのにじゃなくて、若いから」

「いくつなの」

「二十五」

「それでもう山に入り庵（いおり）に棲むって感じ？」

「いえ、それ以上かな。『悠々たる哉天壤、遼遼たる哉」

古今。五尺の小軀（ししょうく）を以て此大をはからむと

す。ホレーシヨの折畳字竟に何等のオーソリテイを価する

ものぞ。万有の真相は唯だ一言にして悉（ことごとく）

す。曰く不可解』……」

亮は、十八才で日光の華厳の滝に身を投じた藤村操

（ふじむら・みさお）の遺書『巖頭の感』を引いた。

「その先はいいわ、やりきれないから」

知子は急激に冷めていく自分を感じた。

「ねエ、償いをさせて」

もう本題に入りたいと思った。

「ジイアは告訴しないと云ってる」

「嫌なの、それだけは勘弁して」

「え？ だって伊豆では、ジイアに告訴するなって口説

（くど）いたんじゃないの。あいつ、帰って来たら、俺

との約束破って急に変わっちゃって」

「理由は？ 言った？」

亮は肩をすぼめて否定した。

『あの日：』

ジイアが出した三十万という金で、亮は爆発した。

「お前からだ売ったな」

手が先に出た後、亮は身震いしながら言った。

ジイアは頬を押さえながら何度も頭を振った。

「じゃあ何だこれ。お前が言ってたモデル料の二倍もあ

るじゃん。あそこ洗ってって、しつこいと思つたらバ

カヤロ、そこまでやるかよ」

「してないったら」

「売春はしてないってことか」

「うん」

ジイアが涙を拭って何度も頷いた。

「じゃ、この金は？」

「先生が無理言つたからって」

「無理って」

「ポーズ」

「恥しいかたちでることか」

「うん」

「分つた、お金はいい。でもお前セックスしたな、山本

蘇芳と。きょうのお前、後ろめたさで一杯だった」

「してない」

「した！ お前嘘が下手だもんな」

「した……」

ジイアがうなだれて認めた。

「別れよう、もういいや」

「嫌！ やだ」

亮の背にジイアが抱きついた。

「やられたんだもん」

「何？」

亮はジイアに向き直つた。

「山ん中だし、一人だし、他に誰もいないし」

「強姦？ 蘇芳が？」

亮は、泣きじやくるジイアを抱きしめて、小首を傾げた。

「亮さん……亮さん」

知子の呼び掛けに、亮は我に還つた。

「具体的に出してくれる？ 告訴という刑事上の問題は別にして、慰謝料は当然ですからその額を」

「俺が？」

「そうよ。一番傷付いたのはあなたかもしれないし」

知子は和姦と知って、尚更償おうとしていた。女の意地と、同じ立場に置かれた者に対する同情と、その二つが知子突き動かしている。

「条件は？」

「別に。刑事上の罪は山本が償うでしょうし」

知子は、山本とジニアが抱き合う姿を思った。亮には最後まで言うまい、とも。

亮が真つ直に知子を見詰めている。

『白眼がとつてもきれい』

知子は、亮とジニアの印象を並べてみた。これ以上はないという組合せに思えた。

『少なくともジニアの隣に蘇芳は似合わないわね』

長い沈黙が続いている。

『頭の中で算盤(そろばん)弾いているのかしら。そんなタイプに見えないけど』

知子がじれた。

「決った？」

「茜先生の心の痛みが取れる程度 of 金額」

知子は息を呑んだ。

『やっぱり鋭いわ、この子』

「なぜ分ったの」

「払いたがっているから」

「払えば告訴しないでくれる、わたしが密かにそれを期待してつて可能性もあるでしょ」

「告訴は別にして、罪は別にして。さつきからの台詞を

繋いでいくと茜先生の心につかる」

「まいったわね」

「いただきます」

「え？」

「五百万円。それ以上だと人生狂うし、それ以下だと茜先生に失礼だし」

「いいわ」

知子はハンドバッグから小切手帳を出すと、サラサラと金額を書き入れた。

「ジニアは受取らないな、きつと」

「いいのよ、あなたの自由で」

「このまま逃げるかも、俺って」

「それができるくらいなら、亮さん、あなたもつとビッグな社会人になってるわよ、はい」

知子は小切手をクルリと回して亮の方に向けた。

「俺のバイト、日当いくらか分りますか？」

「さあ……」

「約七百七十分の一」

「哀しい計算ね」

知子はバッグを抱えて立った。亮が急に小さく見えた。

「領収証は？」

「うーん、できればジイアちゃん宛に」

亮は二重の意味を理解して、片頬で笑った。

知子がホテルのフロントの札を受けて出て行く。

亮は、小切手の数字をしばらくの間見詰めていた。

「わたし嘘ついてた」

亮の上に乗ってジイアが言った。

「そうだろ、バカ」

「叱られると思ったし、亮が行っちゃうと嫌（や）だから」

「優しかったか、蘇芳先生」

「うん、可哀相だった」

「可哀相？」

亮もこれは意外に思った。

「ポーズ決めた日にね」

「最初の日か」

「そう。わたしポーズとってるだけで濡れちゃって」

「お前らしいや」

「いじわる」

「それで？」

「先生、急に涙流して、そーっとあそこ吸ったの」

「可哀相とどうつながるんだ」

「だって奥さんに捨てられたんだと思ってたし。あとで

茜先生に会って違うって分ったけど」

「そう、あの二人は愛し合ってる」

「知らなかったの！」

「分った分った。で？」

「先生、また泣いたの」

亮は溜息をついた。

「そういう人だとすぐやらせるのか、お前は」

「そんなことないって、嫌だな。五日掛かって絵ができ

て……あのポーズきついよね、それでぐったりしたら、

ありがと、って何度も何度もキスするの」

「泣きながら、か？」

「そう。先生のアそこが立ってて、コツコツぶつかって

……だから、先生、してもいいよって」

「言っちゃったわけだ」

「ごめんささ」

「底抜けのバカだ、お前は。いや、危なっかしい子だ、いい子だ」

亮はジイアの中に自分を入れた。

「でも亮に悪くて。踊り子の中でそればっか思ってた」

「それであそこ洗って、してして、か。あれがなきやわかりっこないのに」

「捨てないでね」

「捨てるほど偉くないよ」

「よかった」

「ジイア……」

「うん？」

「でも、好きは好きなんだろう？ 山本蘇芳」

ジイアは頷いてみせた。

「茜先生も」

「大好き」

「そっか……」

亮はジイアを両手で持ち上げるようにしてどけた。

「怒ったア？」

「バアカ」

亮は、ジイアの髪を笑いながらくしゃくしゃにした。

『これで決ったな』

ジイアの拳を背中に受けながら、亮は遠い眼をした。

亮は、伊豆北川駅から歩くことにした。

ジイアの記憶を頼りに「それらしい別荘」を人に質きながら進む。旧国道沿の崖側に「あかね山荘」を見つけ、山本蘇芳の表札を確かめたときは正直なところホッとした。

ジイアに聞いた山本とは別人の山本が居た。二三言葉を交わし、その容貌を見れば紳士であることが分る。

亮は中に入る前に念を押すことにした。

「本当に山本蘇芳さんですよ」

「蘇芳です、何かご不審でも？」

「あ、いえ」

「いつかいらつしやると思っていました。どうぞ」

亮は一階の応接間に通された。

「先日は若干取り乱しまして失礼を」

「俺の方こそ、電話で言うことじゃなかった」

「で、今回は正式に告訴するということ？」

「いや……」

やっと辿り着いたところで頭の回転が鈍い。亮は話のテンポを緩める必要を感じた。

「何かやりますか」

山本は洋酒棚を指差してから、中腰になった。山本も同じ気持だったに違いない。

「ビール、あったら」

「確かに未だ暑いな」と微笑して山本は、冷蔵庫に向かった。

「責任は感じるわけ？」

亮はあえて敬語を使わない。それが自分のスタイルだと考え、損と知りつつ改めようとはしなかった。

「いいえ」

山本はいとも簡単に否定した。

「どうぞ」

亮のグラスにビールが注がれた。

「どうせ自分が払うんじゃないからな」

「もう茜に下交渉済みですか」と、山本は自分のグラスにもビールを注いだ。

「茜とは離婚してる。彼女を巻き込まないで欲しい。金

はなくても罰はこの身で受けるから」

「責任を否定して処罰を肯定している」

「矛盾してますか」

「かなり」

「そうかな……」と、山本は一気にグラスを干した。「ジイアへの愛、それがあると矛盾は消えるけど」

今度は亮が飲み干した。

「君は頭がいいね。ジイアの言う通りらしい」

山本が亮のグラスにビールを注いだ。

「呼び捨てるわけ……」

「いいって言ってくれてね。でもここではやめよう、君の気持を逆撫(さかな)でしそうだ」

『もう十分してる』

亮は口を「へ」の字に曲げた。

「ところで、きょうのご用件を」

山本は穏やかな口調で言った。

「アトリエ二階ですよね」

「絵はありませんよ」

「嘘ならすぐ分る」

「どうぞ見ってもらって結構、イーゼルしかない。額を作

るために業者に出してゐるんです」

亮は二階に駆け上がり、すぐに戻つて来た。

「ジイアの絵、売つてもらおう」

「ほう……」

「その値段と慰謝料とを相殺する」

「あれは売らない」

「あんたにそんな権限はない」

「作品は作者のものだ。破ろうが燃やそうが、はたまた売ろうが、君にとやかく言われる筋合いはない」

「ジイアに返せと言つてるんだ」

「絵は自分を描くもの。細密、具象、抽象、それは描き方の呼称に過ぎない。ジイアさんも絵に関して言えばモデル、単なるモチーフに過ぎない」

「理を説くか、山本さん、あんたが」

亮は、冷静に頼むつもりで尋ねて来た。しかし山本の口を見、股間を見る度に、嫉妬の炎が火勢を増していった。

クールを自認する亮が自制心を失い始めた。

『あの唇がジイアのおそこを吸つた。この男のペニスにジイアの中に入った』

その想いが、呪文のように若い亮の心を緊縛している。

「泣いたんだって、ジイアの裸の前で」

亮は一気に唇（はずか）しめに出た。

「ああ、泣いた。君は美しいものを見て、涙したことはないのかね」

「押んでセックスするのか、あんたは」

「そうした」

「みじめな男」

「そう思う君が哀しい。ジイアさんの体はそのまま美術品だ。僕はその美しさに泣いた、感動したんだ。君は毎晩のようにあの子を抱きながら、泣くほどの感動もせず、押むほどの有難さも感じてしまい。むしろ習慣で抱いて、彼女の美を解ろうともしていない」

「ジイアの裸で画家としての名を売ろう。その程度であんたが何を偉そうに」

「あの絵は僕のものだ。売らないし、展示もしない」

「嘘だ」

「君には嘘に聞こえる。愛がないからだ」

「愛を言うかあ」

亮は体ごと笑い出した。自分の中にいつもと違う何か

を強く感じながら、それをも吹き飛ばそうとするかのよう  
うに。

「君がジイアさんを愛しているというなら」

山本は大きく息を吸ってから、凜とした声で言った。

「自分の力で彼女を護って、いつまでも人前に恥部を晒  
させるんじゃない。僕が自分の全てを出しきった『入相  
の鐘』を、蔵に仕舞おっとうしているのはそういうことな  
んだよ」

亮は惚けたように山本を見た。

「ジイアさんが告訴するんなら僕は争わない。罪を認め  
て刑務所に行くよ。そういうことですから絵は売りませ  
ん。お帰り下さい」

山本と会って帰った亮は、その日から二日間というも  
の、窓ばかりを見詰めていた。

ジイアも食事の仕度の時間を除けば、亮と同じように  
して過した。幸い「仕事」の話は一つも入ってこなかっ  
た。

太陽が今日も、前の小さなビルの後に隠れた。膝小僧  
を抱えた二人の影が急に薄らいだ。

「ジイア…」

「何」

「たそがれってなあ、誰彼って書くんだ、誰そ彼。薄暗  
くなると遠くから四五人で男がやってきた場合、誰が彼  
だか見分けつかないじゃん、だから誰彼」

「嘘ばっか」と、ジイアが笑った。

「向うから来る人ばっかじゃないよ。隣に居る人が自分  
にとって何なのか、誰なのかだつて見えなくなる。俺つ  
て黄昏（たそがれ）てたのかな、二十五で」

「何言ってるの、さつきから」

「変だよなあ」

「変。わたしが見えないってこと」

「怒る？」

「うん」

「俺のポストンにさア…」

「あの革の、汚いの？」

「そう」

「捨てなさい、あした。燃えるゴミの日だから」

「もったいないよ」

「ケチ」

「五百万円入ってる」

「あら、そう」

「だから俺たちしようと思えば結婚できる」

「嘘っか……!! ……」

ジイアが急に立ち上がった。

「嘘だよ」

「ん、もう、バカ」

ジイアが亮の背にびたりとついた。

「二十年経っても、ジイアの中から全部舐めれるか」

「スケベ」

「答えが出なくて、いつもプロポーズできないんだ」

「じゃ、誰とも出来ないよおだ」

ジイアが亮の耳を口に食(は)んだ。

「一人の女を一生愛するなんて約束 無茶だよな」

「いいのよ、そのときそう思えば」

「ジイアは気楽だ」

「ずっと、こうしてようよ。わたし、亮に無理してプロ

ポーズして欲しくない」

亮はジイアの手を握った。

「俺……」

「言ってる」

「就職っての、してみようか」

「ほんと?」

「新卒で入った奴らに二年以上水あけられてるけど、俺なら追いつけるかもしれないし、小早川ゼミの先輩と偶然遭って名刺もらったし、商社だからある程度実力主義だし。おい、ジイア……」

「うれしんだ」

「バカ、泣き虫が」

「だって近所の人が、あんな女に捕まって、大学で優秀だったって皆んなが知ってて、人生棒に振ってるって。でもほんとのことだから哀しくて」

「俺こそ、お前のヒモみたいだったからな」

「そうよ、細いヒモで切れそう」

「こいつ」

ジイアは、のしかかってきた亮の眼が、涙でふくらんでいるのを見た。

「いいシーン」

ジイアの台詞に、亮が微笑を返した。

「する前にお願いいい?」

亮がこくりと頷いた。

「お金、もらつとこおよ、お祝いに」

亮はジイアをひつくり返すと、シヨーツを剥いで、思いきり尻を叩いた。

「痛アい！」

薄暗い空に届きそうな悲鳴であつた。

この日の海は優しいようにみえた。

見る者を引き込みそうな深い碧色でもなく、荒れて厳しい灰色でもなかった。波の白ささえ目立たず、返す波に砂がざわめくこともなかった。

山本は、脛（すね）を濡らしながら波と遊ぶ知子を見ていた。

「二千万で私にあの絵、任せて貰えますよ。あの手の絵のコレクター、知ってるんですよ」

額を頼んだ業者から聞いたのであろう。得体の知れない画商が山本を口説きに来た。

「あの手の絵」という言葉を、山本はいまも反芻してい

る。

「ねエ、靴脱いで入ったら？」

「僕はいい。茜を見ている」

「青春しようつてば！」

知子のはしゃぐ声を、画商の囁きが消した。

「この絵、どこの審査も通りませんよ、先生。アンデパンダンでも展示自体無理でしょうね。それより先生、二人で儲けましょうよ。先生が描く、私が捌（さば）く、ねえ、昔、浮世絵師が春画で糊口を凌いだ例もあるじゃありませんか」

パンツと鈍い音がして画商が倒れた。山本の細い腕のしなりが、画商の頬に予想以上の衝撃を与えたらしい。

「おぼえてるよ、訴えてやるからな」

捨て台詞に、再び知子の声が重なった。

「もう、きょうぐらい心を頂戴よ」

「すまん」

「どうしたの、すぐ謝つたりして」

知子は、横に座ると、山本のこめかみを突ついた。

笑顔は絶やさないでいる。

九月も半ばになっていた。海岸に遊ぶ観光客はもう数

えるほどしかない。

「茜……」

「絵のこと？」

「売りたいくないんだ」

「じゃ、やめたら」

「売れば茜からの借金を全部返せる」

「じゃ売って返してよ」

知子は何の迷いもなく明るい。

「このチャンスを逃せば一生このままだし……」

「一言いうわね。わたし返せなんて一度も言っていないんですけど」

「前ならそれでもよかった」

「どう違うの？ 今と」

「ジイアと茜が尋ねて来た日、僕は茜を辱しめた」

「きれいな抱擁だったわ」

知子はうっとりとして見せた。

「からかうなよ」

山本は苦い表情で言った。

「あなたのジイアは遠音に響く入相の鐘。辿って行ったところで道に迷うのはあなたよ」

知子は山本の膝を優しく揺すった。

「亮とジイアね、結婚するそうよ。あなたとわたしとお二人で来てくださいって、披露宴。勉強させてくれるわね、若い人って、前しかみてないわ」

「こだわらないのかね、亮という男。この前の様子じゃ、殺されるかと思っただけ」

「あの日のあなた、素敵だったって。目が醒めたそうよ。亮君。法科万能の典型みたいな子だから就職も何となくクリアだって、ジイアが弾んで弾んで、それはもう大変な騒ぎ」

「茜は……どうなんだ」

「え？」

「あの子を抱いた僕に、何のわだかまりもなく脚を開けるのかどうか」

知子は砂を蹴って、山本の前に座った。

「ねえ、よく聞いて」

山本が語気に驚いて顔を上げた。

「男の愛が、ペニスのピストン運動にあるなんて思わないいわ。だから女の愛が、裸や膣にあるなんて思わないで」

知子は、アトリエの海に面した窓を開けてみた。

床のチリとゴミがせわしげに動き回り、最後に『入相の鐘』を支える特製のイーゼルの脚元で渦を巻いた。額に納まった百号の絵は誇らしげに見えた。

「どうして僕なんかと居るんだ？」

山本はシチューを掬う手を止めて、力なく言った。

「難問ね」

「もう離婚してるんだし、第一お前ほどの女だ、他にお似合いの男はいくらでもいるだろうに」

「他にもいるかもしれないわ、確かに。でもここにも居るのよ、ごく身近に」

知子はシチューを、音を立てて啜った。さらに、「こういうことか」と、スプーンを丸ごと舐めた。

「他で出来ると思う？」

「茶化すな」

「ううん、大事なことよ。無防備に子供に帰れる場所を持つている人、少ないわよ。そうさせてくれる人も」

「だから」

「みたいよ、どうも。あなたって自分じゃ気付かないでしょうけど心が広いのよ」

「その手はくわない」

山本はフランスパンを手にした。海辺の少女気分が焼かせた知子の手造りだ。

「わたしにもちぎって」

「自分でしろ」

「いいじゃん、月に一度のデイトなんだから」

言われるままに、山本はパンを分けた。

「わたし、やんもジャム」

「僕はバターだから、ほらセルフサービス」

「ぬって」

知子は、山本が差し出す手を押し戻した。

「ナイフで蘇芳色をひくみたいに」

「茜色じゃなくてか」

「そう…：わたしの色で塗りつぶしてなんて、ちっとも思つてない」

「お前、女にしとくにや惜しいところある」

山本がやんものジャムを塗り始めた。

「なア、茜」

「うん？」

「この次のとき、三井も呼んでやらないか。軽薄で三井

代言などあるけど、今度のことじゃ面倒かけたし」

知子は、三井にレイプされたことを伏せている。

「いいわよ」

知子は笑顔でそう答えた。

『どの面下げて来られるっていうの』

心の中の過激な言葉に、山本が反応した。

「水いらずにしようか、やっぱり」

知子はパンを受け取ると、嬉しさの中で頬張った。

潮騒は聞こえない。

海は別荘のはるか下にあった。月の光にただ沖の波だけが呼応していた。

「ジイア、怒る？」

知子はカンバスの中の二人のジイアに質いた。

「山本はねえ、亮にあなたを蔵に入れると言ったそうよ。あなたのおそこを、人前に晒すなって怒ったあとで。愛情があるから厄介なの。山本はあなたの絵を美術展に出品できない、人にも売れない、譲れない、個展を開いて展示することすらできない、そういう状況に自分を追い込んでしまったのよ。でもジイア、わたしは嫌なの、あ

なたの絵を一人見詰める山本を想像するのが。山本があなたを描いたときの心を、一人持ち続けることが」

レースのカーテンが、風に吹かれてレールを走った。

「わたしが買うわ」

「それはない」

「買うから好きにさせて」

「また切り裂くつもりか」

「焼くよ、影も形もなくすのよ」

「バカ言え」

「バカはあなたただわ。恋と愛の区別もつかないで。もう絵はやめたの？ あれ以上の作品は描けないっていうの？ だったら毎日ジイアを見ていいわ。屋根裏の倉庫で素っ裸になって、猿みたいに、死ぬまでオナニーすればいいんだわ」

風がアトリエの中の知子を巻いた。

髪が知子の顔を被った。

「わたしってみじめ？ ジイア」

絵の中のジイアが、首を振ったように見えた。

「そうよね、下田は二人にとって『まほろば』だったもの。解かり合えたもの」

小さな火花が散り、炎が立った。左手には、焚き付けになるであろう紙の束があった。

「許してあなた」

火は紙からカンバスへと乗り移った。

「ごめんね、ジイア。あなたが邪魔なの」

アトリエが炎の色に染まった。

「茜！」

階下から悲鳴に似た声が上がリ、階段を駆け登る足音が、知子の耳に迫った。

「わたしを助けて・・・」

「さがれ！」

知子はその場を動かさず、訴えるような目で山本を見つめている。潤んだ瞳の中で、カンバスがメラメラと燃えていた。

「僕のジイアが燃える」と、その場に座り込む山本が見えたような気がした。

消火器の白い粉が、知子の視界を奪った。

「茜！ 手で口を塞げ、バカ」

山本の声が響きわたった。

咳込んで、たまたら窓に向った知子のからだにストツ

プがかかった。山本が背後から組みついたのだ。

二人は勢い余って床に倒れ込んだ。

「いいかげんにしろ」

山本の唇が、知子の目の前にあった。

「飛び出したら五十米は転がり続けるぞ、バカ」

叱りつけながら山本の腕は、しつかりと知子を抱いていた。

特製のイーゼルが、繋ぎを失って崩れ落ちた。

「大丈夫か」

起き上がって見ると、知子の膝が擦り剥けている。

山本は躊躇いもなく、傷口を唇で拭いた。

「亮はねえ、お酒飲んでわたしがゲロしたとき、顔中舐めてきれいにしてくれたの」

ジイアの嬉しそうな顔が浮かんだ。

『わたしもいま、きつとジイアと同じ顔をしてる』

知子は、いま、至福のひとつときに酔っている。

(完)

※小説中の刑法、司法試験法、弁護士法などの法規関係については執筆開始当時のままになっています。